

国立東京療養所にて

聖霊の賜物

――コリント前書第12章1～11節――

〔『愛泉』誌第27号、1960年3月20日発行より転載〕

1959年2月22日

小池辰雄

教えにあらず 健全なる福音 一つ御霊 真の現象体 愛の迫り 特質の自覚

【コリント前12】

1 兄弟よ、霊の賜物に就きては、我なんじらが知らぬを好まず。2 なんじら異邦人なりしとき、誘わるるままに物を言わぬ偶像のもとに導き往かれしは、汝らの知る所なり。3 然れば我なんじらに示さん、神の御霊に感じて語る者は、誰も『イエスは詛わるべき者なり』と言わず、また聖霊に感ぜざれば、誰も『イエスは主なり』と言う能わず。4 賜物は殊なれども、御霊は同じ。5 務は殊なれども、主は同じ。6 活動は殊なれども、凡ての人のうちに凡ての活動を為したもう神は同じ。7 御霊の顕現をおのおのに賜いたるは、益を得させんためなり。8 或人は御霊によりて智慧の言を賜わり、或人は同じ御霊によりて知識の言、9 或人は同じ御霊によりて信仰、ある人は一つ御霊によりて病を医す賜物、10 或人は異能ある業、ある人は預言、ある人は霊を弁え、或人は異言を言い、或人は異言を釈く能力を賜わる。11 凡て此等のことは同じ一つの御霊の活動にして、御霊その心に随いて各人に分け与えたもうなり。

●教えにあらず

聖書は、これは「キリスト教」といいますが、教えの書ではないのです。

「キリスト教はいつたい何を教えているのかしら」

と、聖書を解ろうとするのが一般の角度ですが、イエスはこれを「キリスト教」とは言われなかった。「よろこばしきおとずれ」「福音」と言われました。あるいは、「天国」と言われました。

「天国は近づいたから、悔い改めてこれを受けとれ」

と言われた。「信ぜよ」は、「受けとれ」でいい。

「福音を受けとれ」

ということです。「天国」とか「神の国」とか、ヨハネ伝では「永遠の生命」と言っていま



すが、これはみな同じことです。キリストは自ら「キリスト教だ」なんて言われない。ところが、後の人たちが「キリスト教だ」なんて名付けて、そしてさかんに言ってきました。「キリスト教」なんていうから、何か教えのように思つて、

「さあ、どういう教えかよく研究してから、よく聞いてから、拳々服膺（けんけんふくよう）（常に心に銘記し忘れないこと）しよう」

なんて、それは実は大変迂遠（うえん）な話であつて、しかもそれで聖書の世界の中に入るかというと、大変問題であります。

神さまはイスラエルの民に向かって呼びかかってきた。

「アブラハムよ、アブラハムよ」

「モーセよ、モーセよ」

「エリヤよ、エリヤよ」

と。また復活のキリストもサウロに対して――このサウロ（のちのパウロ）は素晴らしい使徒ですが――

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するのか」

と、呼びかかってきた。そして、ものすごい天的な光で向かってきましたから、

「我が目より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」

と、開眼したのです。眼が開いた。そしたら、見えるものが見えてきた。わかつたのではない。見えてきた。聞こえないものが聞こえてきたのです。ヨハネも、

「我らが聞きしところ、目にて見しところ、つらつら視て手触りしもの、即ち生命の言」（ヨハネ第一書1・1）

と言いましたが、そういった現実の世界に新しくふれるということです。

福音はそういう神の現実の中に自分が投入し投身して、それにぶつかるといふドラマです。神のドラマに入っていく。これが、

「聖書は神のドラマである」

と私が言う理由です。明暗交錯している多次元的現実の世界の中に投身していくところ、その光の中に入り光に包まれる。その生命の水を飲み、その生命のパンをくらうというのが、福音、大歓喜の音信（おとずれ）を受けとるといふ角度です。これは喜ばしき音信です。その饗宴、御馳走の中に、神さまの御馳走の中にあずかる。プラトンにも『饗宴』というのがあります。『汝、エホバの神は敵前にわがために筵（えん）を設け、わが首にあぶらを注ぎ給う。わが酒杯は溢るるなり』（詩篇23・5）

という世界がこの大歓喜の音信です。

私自身も数年前にこの角度に気がついたら楽になった。そしたら、聖書の世界が楽に読めてきた、つかまれてきたという始末です。

「これでもいい」



なんていう世界はひとつもない。私は限りなく死に至るまで前に進もう。進まされるだけです。生命より生命へ、光より光へ、恩寵より恩寵へというわけです。退くことを知らない世界になる。躓いても、転んでも、倒れても、結構です。ただ前進あるのみです。

皆さんも、いろいろな人生の艱難、辛苦にあつて、躓いたり転んだり、悲観したりすることがあります。しかし、自分を見ることはしない。環境を不服に思うこともない。自分の生い立ちがどうである、自分の性質がどうである、自分の才能がどうである、そんなことを人と比較してけちけち考える必要もないのです。

今日来ていらつしやる人たちは、皆さん一人ひとりが本当に質的にその世界に入ってください。今晚一晩かぎりに入ってください。

「またこの次もあるから、今日はこのくらいでいいでしょう」

という気持でなくて、この一集会に全生命をかけて、私が語り、あなた方がこれを聞き、これにぶつかってください。語るも聞くも同じことでして、ただこの驚くべき神の現実の中に入つていこうとする一念です。だから、私は集会にはお説教をしません。私は自分の中に臨んでくるものをただぶちまけるだけです。

そんなわけで、聖書に自分をたたきつけてください。そうしたならば、何ものか入ってきます。分析、総合は、何もいりません。日本人は気合のわかる国民であるのに、なにゆえそんなに分析、総合を、面倒くさいことをしているのかと思うくらいです。皆さんも単純な幼児のような気持になつて、これにぶつかってください。

●健全なる福音

今日はコリント前書12章のところを読んでいただきました。今、日本のキリスト教界の新教は宣教百年を迎えまして、リバイバルを起こさなくてはいけない。結構なことです。

私は皆さんに、いろいろな現象が起きますときに、どういう角度でこの年を迎えるべきであるかという大事な方向づけと一緒に考えてみたいと思う。

「兄弟よ、霊の賜物に就きては、我なんじらが知らぬを好まず。

「賜物」という字は「カリスマ」という字です。「霊」という字は「プニューマ」という字です。キリストが、

「心の貧しき者は幸福なり、天国はその人のものなり」

と言われた。あの「心」という字は「霊」「プニューマ」という字です。この霊ということ、賜物ということとは違うのです。今、パウロは「カリスマ」（賜物）のことについて言及しようとしている。

このコリント教会はいろいろな問題があつた教会で、パウロはいろいろな角度からこれを論さなければならなかつた。その点で問題のあつた教会であつたということは、後代の人たちにいろんな意味においてよき指示を与えてくれました。



パウロほど福音を健全な構造において展開している人はない。ヨハネは深い人です。また、ペテロはなかなか熱烈な使徒でありました。ペテロ、ヨハネだけだったら、キリスト教の歴史はいろんな哲学、思想、その他文明の波というものに、どれだけ正しく乗りこえてきたか疑問です。もつともそれは神さまがなさるから、一面においては心配はいりませんが、しかしパウロが与えられたということは、重大な意味を持っている。それは彼の福音の構造が実に健全に、あらゆるときに、あらゆる問題に向かって、ちょうど宮本武蔵の剣が縦横無尽の守勢攻勢の剣を持つているように展開している。その意味においてパウロを学ぶということは非常に大事なことです。

もちろん、福音の福音たるところは福音書にあります。とにかく福音書が本当に深く正確に読まれるためには、やはり一度パウロを通過する必要がありますのです。

●一つ御霊

2 なんじら異邦人なりしとき、誘^{いざな}わるるままに物を言わぬ偶像のもとに導き往かれしは、汝らの知る所なり。3 然れば我なんじらに示さん、神の御霊に感じて語る者は、誰も『イエスは詛^{のろ}わるべき者なり』と言わず、また聖霊に感ぜざれば、誰も『イエスは主なり』と言う能^{あた}わず。4 賜物^{たまもの}は殊なれども、御霊は同じ。5 務^{つとめ}は殊なれども、主は同じ。6 活動^{はたらき}は殊なれども、凡ての人のうちに凡ての活動を為^なしたもう神は同じ。

ここで「御霊」「主」「神」ということが期せずして畳みかけてありますが、カリスマは異なるけれども、プニューマである御霊はみな同じである。務めは違うが、主は一つである。また、活動は違うが、すべての人にすべての働きを自由自在になしたもうところの神も同一である。そして、賜物の世界は実はいろいろあると云って、12章の後半においてはその構造を人の身体にたとえて言っています。

主は即ち、頭^{かしら}であつて、教会、集会、すべてこの信徒の集まりというものは、みな体となしている。一つの集会において、各々一人ひとりみな一つ一つの部署（部分）である。また、たくさんの集会が全世界にあります。カトリック、プロテスタントといわずに。これが全部キリストの体としての「エクレシヤ」ということになる。カトリックがいくら

「カトリック教会以外に救いがない」

と云って頑張つていたつて、神さまの角度からはカトリック以外にもたくさん天国に入る民はあります。「キリスト」の「キ」の字も知らない人も、天国に入るでしょう。誰か知らんやです。天国の民は誰も人間が人間を限定することはできない。

それくらいに、神の世界は憶測することのできない素晴らしいものであると思います。いくら神学博士といつても、さて立派な神学の本を書いて、これで天国の門を開いてくれと言つたつて、どつこいそうはいかない。天国の門はその人の全実存をもつて、神さまが



計量なざるのであって、これを誰が計ることができようか。とにかく、みんな体のいろんな部分をなすものであって、有機体的構造になるものであると、パウロは言っているのです。ところが、キリスト教の現状を見ますと、歴史においてもそうです。信仰箇条が合わないといって宗教戦争を始めたか、カトリックとプロテスタントが争ったり、また、プロテスタント教界のいろんな教派が争ったり。しかし、いくら人間的にまとまったものにしましても、さあ内側が本当^{まこと}にまとまっているかどうかは別問題であります。またしかし、外側がでんでんばらばらであっても、本当に内側にある一つのものがあるならば、これは神さまの前に一つになる。大事なことは、

「内的の本当の一をもつか」

ということに帰するのです。これを全体主義的なある一色に塗りつぶすようなことは絶対にいけない。たとえば、目が耳に向かって、

「お前は目でないから私のように目になれと言って、全身が目だったらどうなるか」

と、パウロが言っている。目があり耳があり、というようなわけで、このさまさまの部分があつて、そして、有機体的であり有機体的全一でありまして、いわゆる画一的全体主義ではない。ところがややもすると、非常に確信に満ちた人、また、非常に霊の賜物をいただいた人やそのような集会はそれをもつて、

「あれは生命が足りない」

と言って、全体を塗りつぶそうとすることがないとも限らない。また、そういった素晴らしい現象にぶつかつて、

「あつ、素晴らしい」

と言って、それに巻き込まれないとは限らない。そうなってきたら、全身が目になってきたらどうなりますか。その体は亡びる。いかに目が素晴らしいといったって、

「全身が目だったらどうなりますか」

とパウロは言っています。キリストはそういうことを喜びたまわらない。どうか私たち、皆さん一人ひとりは、神さまに造られたということとは、

「人、全世界を^{もつ}くとも、己が生命を損^もぜば、何の益あらん」(マルコ8・36)

と、キリストが言われるように、人格的に造られたということとは、一人ひとりが絶対に他の人とかけがえのない人として造られたのであり、この自覚は非常に大事なことです。

人間の自由ということは、人格的にこのように造られてあるということです。一人ひとりをその個として尊重し、また、その人は神さまに造られたその才能、性質、全体の存在というものを、ただそれを固執するということではない。それを限りなく、神のものとして延ばしていくということです。

これは桃の花ですが、桃の木は桃の木らしく展開するのであって、それが梅のまねをしたらおかしくなつてきます。梅桃なんていうのはありやしない(笑)。桃は桃であり、梅は



梅である。それがどうも人さまは梅が好きだから、自分は桃に生まれたが、なんとかして梅になりたいなといったつてダメですよ。そんなことはない。桃は桃らしく、梅は梅らしく、桜は桜らしく、というところに百花繚乱として大調和、大讃歌がある。すべての音が一つの音だったらどうなりますか。交響楽は生まれてきますか。偉大なる交響楽はそのさまざまな音を発するさまざまな楽器を通して、有機体的なハーモニーとなって奏せられる。

私たちの身体もそのとおり、我々キリスト教界の存在もそれぞれの在り方というものである。それぞれの性質というものがある。ですから皆さん、大事なことはパウロが、

「御霊は一つだが、賜物は違う」

と言ったのはそのことです。違わなければならない。ただ問題は御霊が一つということなのです。一つ御霊ということを観念してもしようがない。そこで、

「聖霊は一つである、キリストは一つである、神は一つである。それゆえに全キリスト教界はもはや問題がない」

といったつて、どっこいそうはいかない。いくらそれが命題として観念しても、やはり、問題はいつまでたつても残るし、それは事実が証明する。それは観念ではない。具体的な世界に私たちはどうして入るか。そのキリストを「主」と呼び、神を「アバ、父」と呼び、

「この内住する御霊は私の生命である」

と告白することのできる、それに問題の焦点はかかってきている。だから、今、キリスト教会は百年を迎えたからどうのこうのと、現象を求めて書きたてなくてもいい。大事なことは各集会、各個人が、

「本当にキリストを受けとっているか」

という一点にかかっている。観念しているか、研究しているか、教えているかではない。

「われを飲み、われを食らえ」

と言われた、

「キリストを飲み、キリストを食らうところにきているか」
というところに帰着します。

●真の現象体

ヨハネ黙示録の3章に、

「視よ、われ戸の外に立ちて叩く。人もし我が声を聞きて戸を開かば、我その

内に入りて彼とともに食し、彼も我とともに食せん」(黙示録3・20)

この言葉です。こういう聖句にぶつかったときに、「これはなんだろうか」ではない。

「我れ戸の外に立ちて叩く」

とは、聖書は現実を語っているのです。ノックしていただく。キリストは力ある方ですから、強引に戸を開けたつていいですよ。だけど、キリストは強引に戸を開けない。戸



の外に来て叩いてくださり、

「もし開くならば私は喜んで入って行く、そして共に御馳走を食べよう」

と、実にそれは豊かな言葉です。キリストは福音書の中にもたくさんの方の福音のことを御馳走に例えていらつしやる。イエスは、

「食をむさぼるものなり」

と悪口言われてみたり、また、キリストはさぞかし断食ばかりしていたかというところ、決してそうではない。喜んで御馳走を食べる人であつたらしい。

キリストは戸の外にいて叩いてくださる。けれども、私たちは自我というものがあつて、なかなかその戸を開かない。開いたと思つたらすぐ閉じてしまう。そして、キリストの光を入れないで、知識や芸術なんという電気をともして、

「ああ、これはきれいだなあ」

とやっているが、このキリストの光は芸術や哲学よりももっと素晴らしいものである。

「神さまって何だろうか？」

と、いくら瞑想しても出てこない。

「しかたがない、ありそうだから信じておこう」

ぐらいにしか思わない。大体、今の若い人に「神さま」なんていったって、

「そんなものはあるか」

と反発するだけです。望遠鏡をのぞいたって出てこない。また、顕微鏡の下にも出てこない。どうもすべてを自然科学的に考えるものだからどうにもならない。ところが、イエスは大胆に言われた、

「われを見し者は父を見しなり」

と。見えざるところの実存者を見えるものとして現わしたものがイエス・キリストです。このイエス・キリストは、この見えざる神を自現した現象体です。もし現象というならば、キリストの現象ほど素晴らしいものはない。

「^{はじめ}太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」(ヨハネ1・1)

というこの言というのは、ヘブライ語で「ダーバル」という語にあたり、「言」というこの語は同時に「事」でもある。事柄(Sache(ザッヘ))でもある。神の事柄なのです。神の現象の事態が即ち、このキリストです。キリストが発した言葉以上の言葉はキリストの全実存そのものです。

「言は肉体となりて我らの中に宿り給えり」(ヨハネ1・14)

というこの「肉体となつた」ということは、言がイエスという現象体となつたということです。神の御霊の言がイエスという現象体となつた。だから、キリストが発する言も、

「わが言は霊なり、生命なり」

と言われた。教えではないと。



「私の言は霊である、私の言は直ちに生命である」

と。だから、キリストの言は、発すれば驚くべき作用をなした。観念の言ではないから。そういうイエスが戸の外にいて叩いてくださる。いかなる哲学が、いかなる芸術が、いかなる政治、経済が、人ひとりの魂を救い上げたか。人間の作り上げたどんな素晴らしいものも、人ひとりの魂を救い上げることはできない。ただイエス、神の現象体のみがこれを本当に生命の世界に入れることができる。どうしてそれを観念的に教えとして受けとっていいでしょうか。イエス・キリストというものを体当たりして受けとらないでどうするのか。自分の魂の戸を閉じて、これを迎え入れないでどうするのか。キリストと一緒に御馳走を食べないでどうするのか。いくら御馳走の

「カロリーがどうの、栄養がどうである」

とわかったって、これは食べなければ、お腹は空いてどうにもならない。

「水はH₂Oである、お茶は何々である」

と分かったって、これは飲まなくては、のどの乾きはいえない。

●愛の迫り

「幸福なるかな心の貧しき者、天国はその人のものなり」(マタイ5・3)

というけれども、一向に魂が貧しくならない。魂がすぐ高ぶったりする。人をどう思ったりこう思ったり、お互いに人間のあいだというものは絶えずそうです。「どうだ、こうだ」と言っている。なんと人間は人間くさいだろうかと思うでしょう。「どうのこうの」というところから私たちは相変わらずダメなものですよ。しかしながら、「どうのこうの」というところをもうひとつ突き抜ける世界がくるかこないかが問題なのです。

「おまえの現実はどうでももう問題ではない。私がおまえの魂をすっかり罪から贖

いとしてやったから心配はいらない。私はお前の魂をすっかり貧しきものにした」

と言って、十字架の迫りが戸の外で私を叩いてくださっているのです。

私たちがぶつ倒れて、そして、自分の力ではない、何かしら開かざるをえない。なんとすれば、十字架のキリストの愛の迫りによって戸を開くからです。しかし、キリストは自ら力をもって戸を開こうとはなされない。

「実はもう開かれてあるよ」

と。それでは、

「私は開かざるをえませんか」

というのがこの十字架の迫りのノックです。

神さまは私たちを物理的なものと思わないから強引に開こうとはしない。最後の一点はその人の自由にまかせてある。それでも、

「いいえ、私はいりません」



と言って閉める人がたくさんいる。その人はその先どうなるか知りません。神さまだけが知っていらつしやる。これは福音の迫りです。恩寵の迫りなんです。驚くべきはこの恩寵であると同時に、また一面からいうと、驚くべき審判さばきでもある。この恩寵を受けそこなったら、自らが自らをさばくことになる。それですから、「福音を聞く」とはいたずらなことではない。けれども、おそるるなかれ、この世界に入ったなら、素晴らしい世界に入れる。そうでなかったら、どこへ行つても本当に、

「私の中に死んでも死なない生命が来しました」

と言って告白することは、おそろくできません。

「人間の魂の世界はごまかしがきかない」

ということですよ。どんなに繕つていまして、どんなに偉そうに言つてましても、最後のところはごまかしができません。人をごまかし、あるいは自分を説きふせていても、神さまの驚くべき世界に入つたならば、ごまかしがきかないのが魂の世界です。

ですから、私たちは恩寵の世界で、十字架のキリストが戸の外に立つて、

「わが十字架によつておまえの戸は既に開かれている。だから開かざるをえないね」

という迫りをもつて来ますから、私たちは、

「ああ、そうでしたか。もう自分なんか見ません。あなたがこのダメな私を解放し

てくださったから、もう大丈夫ですよ」

というわけで、キリストの前にひれ伏すのです。

「分かるの、分からないの」

という世界ではありません。もうその前に降参する。十字架のキリストの前に平伏ひれふして降参したならば、キリストは、

「ああ、よろしい」

といって喜んで何も問わない。無条件に、その現実はどうなにかに惨憺たる現実であつても、そこに無条件にキリストは入つてくださる。

この十字架のキリストを受けないところには、いくら祈つても、ある意味において霊が高揚して霊が入つてきたようでありまして、十字架のキリストを経ているところでは、この霊があるときは聖霊であつても、これは他の霊に切り替えられないとも限らない。霊の世界というものはあぶない、へたをするよね。ところが、十字架のキリストがしっかり受けとられているところは絶対に他の霊は入つてこない。

●特質の自覚

皆さん、ちつとも恐れることはない。おそるるなかれ、この御霊のキリストは、十字架のイエス・キリストの贖罪が完全に私をふつ飛ばしたところの世界において、入りきたり給うところのものは、これは聖霊です。この聖霊を宿す者は、即ちキリスト者であります。



ロマ書8章のはじめにあるように、

「この故に今やキリスト・イエスにある者は罪に定めらるることなし。

どんなにダメな者でも、聖霊のキリストにある者は罪に定められない。罪から解放されて、いよいよ聖化されていく。栄光より栄光に向かっていく。

キリスト・イエスに在る生命の御霊の法はなんじを罪と死との法より解放したればなり」(ロマ8・1、2)

パウロのロマ書8章は素晴らしいところで、これは現実証言です。パウロが現実を断定的に言っている。だから、

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

という。御霊を宿している者は必ず「アバ、父よ」と呼べる。その意味においてこの十字架・復活・聖霊のキリストというものは、なんとしても三相一貫していて、切り離すことのできない事態です。それで皆さんの中に十字架・復活・御霊のキリストを迎えて、

「わが酒杯はあふるるなり」(詩篇23・5)

という。われという酒杯はあふれた。「わが酒杯はどこにあるか」ではない。われというのがキリストの酒杯になる。このわれというものがキリストという生命を受けとり、

「わが首にあぶらをそそぎ給う」

とは、その聖霊のあぶらをそそぎ給うことです。そういう現実に分自分がとつぷり入ったら、皆さんの中に「御霊は一つ」ということがもはや観念でなくなってきました。

御霊が一つであるから、一つの御霊が入ったら――ちょうど人間の身体は手と足と体といろいろあります。しかしどこを切っても血が流れます――即ち、御霊という霊の血が流れている。また、どこを触っても神経が働いている。即ち、全身に御霊の神経がつらぬいている。これが本ものであるならば、賜物はさまざまでもよい。ある人はもの凄く癒しの賜物を持っている。ある人は異言の賜物を持っている。ある人は預言の、ある人は幻の、霊歌の賜物を持っている。結構です。また、ある人は知識の賜物を持っている。これが神学の知識として展開しようが、あるいはそれが芸術の世界で展開しようが、音楽の世界でベートーヴェン、バッハのようになろうが、また、人には何もいえないような女の人の小さなことで展開しようが、いいですよ。本当に御霊が来れば、それは為すわざがすべて霊的なわざなのです。

霊的とは本当の御霊をいただいて展開する事態をいう。何か神霊的なということを行っているのではない。パウロが「霊と肉」というときには本当に、神・キリストを中心としてその栄光を現わしていることを「霊」という。どんなにそれが紙屑拾いでありましても、それは霊です。ところが一方で、神学博士のごとくやっつけていても、それが自己満足や、あるいは利益を求めているような、あるいは地位を求めているのであるならば、それがどんなに立派そうに見えても、それは「肉」です。



賜物がどんなにカリスマ的な力を持っていたとしても、それをもつて一色に塗りつぶして行くようなことをするならば、それはキリスト教界にとつて決してプラスにはならない。

「あの人は霊的に素晴らしい人だ、癒しの賜物がある」

と。結構です。私はそれにケチをつけようとは決して思わない。しかし、もし皆さん一人ひとりが、

「私においては御霊がこのようにのつぴきならなく展開している」

というなら、それでいい。神さまはそれを見ていらつしやる。人まねはいらない。

「汝自身たれ」

とはこのことです。そういうわけで、すべてが目ならばどうなるか、目は目、足は足、手は手であつて、一つ御霊の中にて有機体的に展開するところにキリストの体としてのエクレシヤがある。その部署を、その使命を、その特質を自ら放棄してはいけない。

そのような生命の事態は、あるところには人に見えないような深淵さをたたえている。あるときには滝のごとくにその生命の水は流れていく。あるところはせせらぎの小川のごとく流れています。同じ水です。ただ現象面が違うだけです。大きな滔々たる川はいろいろな相をなして流れています。お互いにその良さをキリストの御名にあつて、キリストを本当に受けるという意味において、キリストの栄光が現われるという意味において、お互いに尊重し、相補い助けあつて行くという、そういう角度でもつて自覚してキリスト教界のそれぞれの面において、キリストの生命を内側において宿して限りなく、深く展開して行くこと。そうしたら、皆さんにおいて現象するところの賜物の事態は、それぞれ神さまはよろしきにしたがつて自由に分け与えたもうという自覚において、清瀬の皆さんは一人ひとりと、また集会として、その特質をよく自覚し、聖書を身読し、祈りを深め、深くキリストを受けとることが最大なる問題です。

そうしたなら、御霊の世界は神のなすままにまかせ、そして賜物の事態を展開していくという、本当の自由と平安と感謝と歓喜による調和とがあることを思わざるをえません。そして一切を貫くところの御霊は愛の御霊であり、

「互いに相愛せよ」

と言われた意味が、ざるを得ざるところの事態となつて展開してまいります。それを何か全体主義的なことになったり、あるいは、

「どの現象、かの現象に、どうのこうの」

と惑わされることのないようにしてください。それが本当に「プロテスタント百年祭」を迎えるところの集会や各個人の大事な自覚の方向ではないかと私は思います。

